

八戸学院大学強化指定部所属学生の キャリアと居住地域に関する研究

井 上 丹

1. はじめに

本学において部活動が主の目的で入学した強化指定部所属学生（以下「スポーツ学生」という。）は、大学での授業や勉学に励もうという意識が少ないのではないかと言われていた。まずは、現状を正確に把握するために、スポーツ学生への調査を行う。そして、何のために学ぶのか目的を感じたとき、勉学への興味関心が高まるという仮説を検証する。

また、スポーツ学生は八戸エリア（八戸市、三戸町、五戸町、田子町、南部町、階上町、新郷村、おいらせ町）以外の出身者が多く、卒業後はそれぞれの出身地域へ戻る学生が多かったため、地域社会としては若者が流出するという損失になっていた。4年間、八戸エリアで学び、生活をして、地域に愛着が持てれば、卒業後に定住したり、将来的に地域に移住したりする可能性があるのではないかと考えた。

そこで本研究では、スポーツ学生のキャリアと地域について、アンケート調査や実証実験を行い、学生の意識変化を分析し、今後のキャリア支援や地域定着促進につなげることを目的とする。

2. キャリアと勉学の意識に関する調査と実証実験授業

（1）授業内容

2017年8月、男子ラグビー部と女子サッカー部の学生50名に対して、90分の特別授業を行った。はじめに実施の趣旨を職員の方からご説明いただき、授業のプログラムを説明。本題に入る前に、学生にはワークシートを配布し、現状の意識について回答してもらった。無記名にして、正直に回答するよう工夫した。

次に、私から「キャリア」とは何かを簡単に説明。明確な定義はないが、私は「自分自身の生き方」として、学生たちが自分の生き方を考えられるように、ワークシートに自分のことを整理してもらった。項目は6つで、①人生でやっておきたいこと。②卒業後の仕事、やりたいこと。③いま、がんばりたいこと、目標。④大切にしていること、こだわり。⑤好きなこと、楽しいこと、趣味。⑥子どもの頃の夢、目標。全部を丁寧に記入することが目的ではなく、現状を理解してもらうために、書けるところから、キーワードのみでも構わないので取り組んでもらった。

ワークシート記入後、アイスブレイクをして、グループ分けを行った。いつものメンバーにならないよう、「⑤好きなこと」が共通の人同士で4,5人のグループになるように調整。グループ結成後、最初は雑談でお互いを知り合う時間を取り、その後、それぞれの現状のキャリアについてワークシートをもとに発表、対話するという形式を取った。

最後に私から10分程度の講義。予測不能な未来に対して、自ら主体的に選択して明るい未来を

築くべきであること。そのためには、選択肢と選択軸が必要であること。キャリアの考え方には「山登り型」と「いかだ下り型」があること。また、生きていくためには、基礎的人間力、情報処理力、情報編集力の3つの力が必要であることを教えた。その後、最後のワークに取り組み終了。

(2) アンケート調査

ワークシートの中で、授業を受ける前の事前アンケートと、授業を受けた最後に回答する事後アンケートを実施した。有効回答数は43名。男子28名、女子15名であった。学年は、1年生12名、2年生11名、3年生9名、4年生11名。

まず、事前アンケートの単純集計結果を図1～4に示す。授業開始前の正直な気持ちでは「とりあえず参加」が51%と最も多かった。考えられる背景には、部活の監督やコーチに参加するようにと言われたから参加したという意識の学生が多いと考えられる。面倒というネガティブな気持ちや無関心な回答は21%と少なかったのは、その後の授業態度からも感じられ、学生はみな真剣に取り組んでいた印象を持っている。

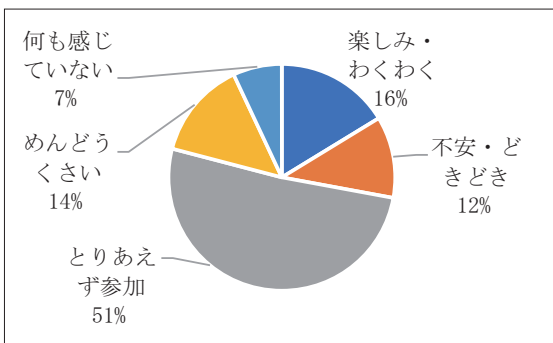


図1 今の正直な気持ち

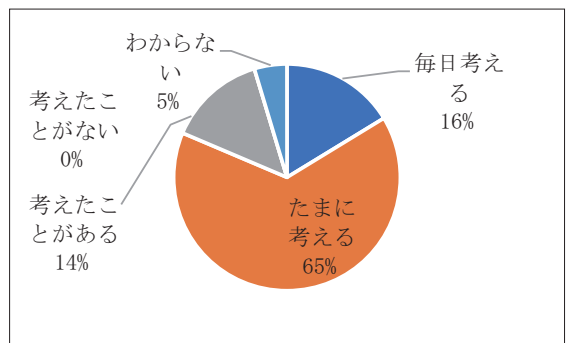


図2 将来について日頃どの程度考えるか

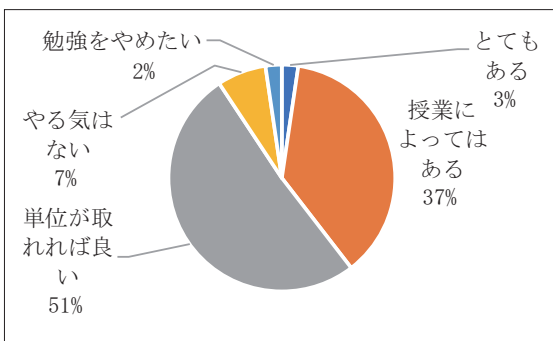


図3 大学で学びたいという気持ち

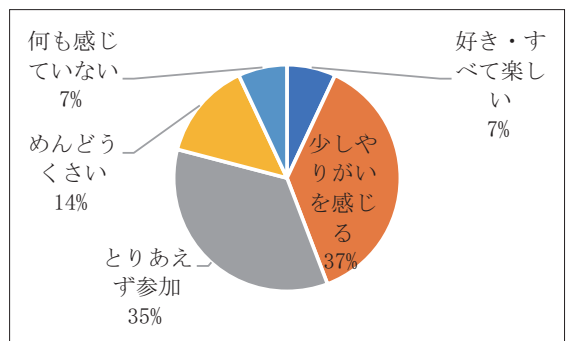


図4 課外活動についての気持ち

キャリアについては、ほとんどの学生が考えたことがあることがわかった。自分の未来について期待や不安を持ちながら大学生活を過ごしていることが推測される。今回検証したい目的でもある大学の学習意欲については、半数が単位取得、卒業できれば良いという意識といえ、

積極的に学びたいという状態ではないことがわかった。また、部活動以外の課外活動として、オープンキャンパスのスタッフ活動やボランティア活動などについての意識も確認したところ、少しやりがいを感じる学生と言われたから参加している学生が割合的に多い結果となった。

今回の授業内容については93%の学生が「理解できた」という感想だった。グループワークへの取組みや講義を聞く姿勢を見ると、全員が参加している雰囲気があったので、納得のできる結果となった。キャリアについてどのような変化があったのかという問いに対しては、最も多く回答したのが「新しい発見があった」という項目で65%の学生が回答した。次に多いのは「他人に興味がわいた」で42%の学生が回答。私が数名の学生に話を聞くと、日頃はキャリアについての会話はほとんどないようで、新鮮だった様子である。

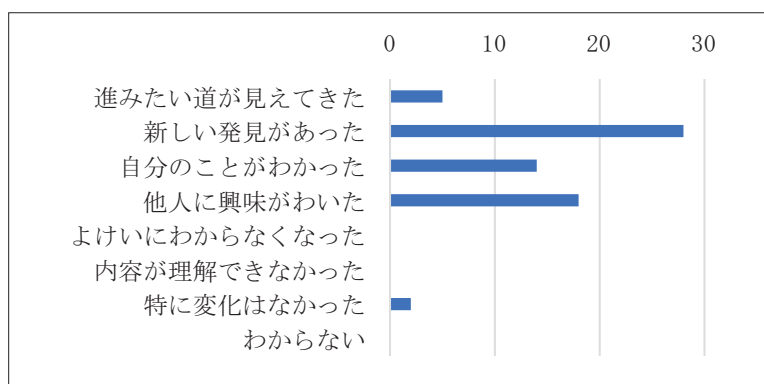


図5 キャリアについて意識の変化（複数回答）

また、今後の学生生活でがんばりたいことややってみたいことについて問うと、最も多いのは部活で74%の学生が回答。次に多いのは「いろんな人の話を聞きたい」が49%、「授業・勉強をがんばりたい」が44%の回答となった。この質問については、次項で詳しく分析する。

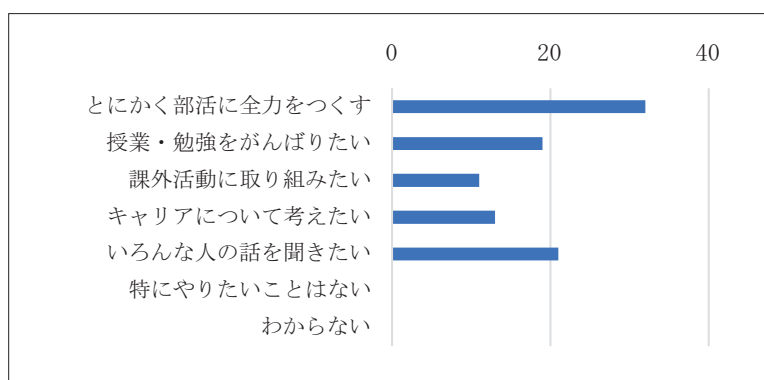


図6 これからの学生生活でがんばりたいこと（複数回答）

(3) キャリア支援授業による意識変化

授業を受けて、これから頑張りたいと思ったことについて、事前の意識からの変化を分析した。まず、学習意欲についての結果を表1に示す。左の数字が事前アンケートの回答者数で、それぞれ回答した学生がこれから頑張りたいことで「授業・勉強」を選択した数が中央の回答数である。何人の学生に変化があったかの割合を右の「変化率」として示している。

事前アンケートでは約半数いた、単位取得して卒業できれば良いという意識で積極的に学びたいという状態ではなかった学生のうち、50%の11名が今後は積極的に学びたいという意識に変わっている。また、やる気がないという学生が3名いたが、そのうち1名がやる気になった。そして、1名ではあるが勉強をやめたいと回答していた学生が、これから頑張りたいという気持ちになっていることがわかった。

表1 学習意欲の変化

事前アンケート結果		これから がんばりたい	意識の変化率
とてもある	1	1	100.0%
授業によってはある	16	5	31.3%
単位が取れば良い	22	11	50.0%
やる気はない	3	1	33.3%
勉強をやめたい	1	1	100.0%
総計	43	19	44.2%

次に、課外活動についても同様に分析した。以前からやりがいを感じている学生が、さらにこれから頑張りたいという回答が目立ち、積極的ではなかった学生の変化はほとんど見られなかった。ここについては、授業内容で課外活動の意義について具体的に話す必要があったと考える。

表2 課外活動への変化

事前アンケート結果		これから がんばりたい	意識の変化率
好き・すべて楽しい	3	2	66.7%
少しやりがいを感じる	16	8	50.0%
とりあえず参加	15		0.0%
めんどくさい	6	1	16.7%
何も感じていない	3		0.0%
総計	43	11	25.6%

今回の授業を通して、キャリアや学習意欲において学生たちに良い効果が表れたことがわかった。日頃から密に接している部活の仲間でも、話題になりにくいキャリアについて会話することで、自分や周囲の人への関心が高まり、成長意欲が増すといえる。また、自分のキャリアを意識すれば、なぜ学ぶのかを考える機会につながることもわかった。

3. スポーツ学生の地域とキャリアに関するアンケート調査

(1) 調査の目的と概要

学生にとって、自分が将来どのように働き生きていくのかキャリアを考えるときに、居住する地域は大きな影響を与える。特に本学のスポーツ学生の多くは八戸エリア外の出身であり、卒業後に八戸エリアに残るのか、出身地域に戻るのか、別の地域に行くのかを選択する必要がある。そこで、八戸エリアについて、どう考えているのか現状を把握、キャリアと居住しようとする地域について、その理由と合わせてアンケート調査を行った。概要は以下の通りである。

- 実施期間：2017年12月11日～18日
- 調査対象：本学の強化指定部に所属する大学生
- 調査方法：直接配布、直接回収
- 有効回答：139名

回答した学生は、男子95名、女子44名。学年は1年生55名、2年生38名、3年生35名、4年生11名。所属する部活は硬式野球部が最も多く60名、続いてバスケットボール部、アイスホッケー部、女子サッカー部がそれぞれ約20名。学生の出身地域に関する質問については、「出身地」とすると定義が個人によって異なると考え、大学入学前に最も長く住んでいた市町村名とした。八戸エリア以外の地域出身が84.2%となり、地域外の学生が多いといえる。

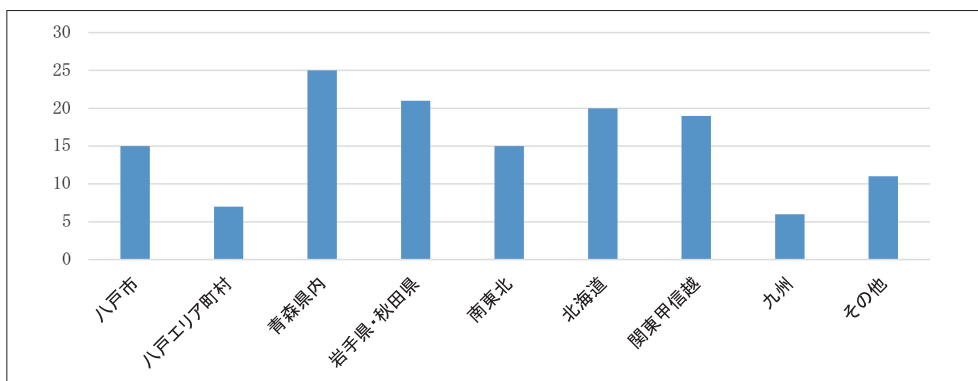


図7 入学前に最も長く住んでいた居住地

(2) 地域とキャリアについて

1) 八戸エリアに関する質問

「八戸エリアに対して愛着を感じていますか」という質問に対して、約半数の51%は「愛着を感じている」または「どちらかといえば愛着を感じている」と回答したが、45%は感じていない、どちらかといえば感じていないと答えている。

次に、八戸エリアの魅力について、表3の項目において複数回答ありで質問をした。前問で愛着を感じていな

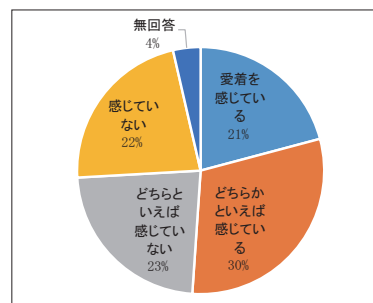


図8 八戸エリアに対しての愛着

い学生がいた影響か、「わからない」が最も多く36.7%の学生が回答しており、これは一つ課題があると感じる。魅力として最も多い回答は「文化・スポーツ施設が整っている」で21.6%、次いで「心地よい人間関係がつけれる」が20.1%となった。

表3 八戸エリアの魅力

選択項目	回答数	選択率
人が多く活気がある	18	12.9%
働きたいと思える仕事がある	5	3.6%
勉強するのに良い環境である	8	5.8%
遊ぶ場所が多い	12	8.6%
無料で使える公共施設が整っている	7	5.0%
心地よい人間関係がつけれる	28	20.1%
乗り物や買い物が便利である	5	3.6%
医療施設が多く、病気のとき安心	6	4.3%
文化・スポーツ施設が整っている	30	21.6%
古いしきたりにとらわれない	3	2.2%
その他	7	5.0%
わからない	51	36.7%
無回答	9	6.5%

2) 大学卒業後のキャリアと地域に関する質問

まず、卒業後にどこの地域で働きたいかを、八戸エリアとそれ以外で質問した。「現在の居住地または八戸エリア」と回答したのはわずか25名（18%）となっている。これが現状の本学の課題であり、8割以上は八戸エリア以外に出たいという結果になっている。ちなみに、八戸エリア以外の出身で、卒業後は八戸エリアで働きたいという学生は6名（5.1%）だった。出身地を見てみると、三沢市2名、十和田市、青森市、岩手県洋野町、岩手県奥州市が1名ずつで、いずれも八戸エリア近隣の地域であった。

では、現在の居住地または八戸エリア以外での就職を希望する理由は何か、該当する114名の学生に表4の項目について複数回答可で質問した。

表4 八戸エリア以外で働きたい理由（複数回答）

選択項目	回答数	選択率
都会で働きたいから	31	29.5%
希望する就職先があるから	41	39.0%
給料や待遇などの労働条件が良いから	23	21.9%
友人・知人がいるから	27	25.7%
保護者の意向だから	2	1.9%
保護者から自立したいから	7	6.7%
生活環境・文化が好きだから	33	31.4%
自分の専門性を活かせるから	6	5.7%
起業するから	0	0.0%
家業を継ぐから	1	1.0%
プロスポーツ選手を目指したいから	5	4.8%
交通や生活が不便だから	11	10.5%

最も多いのは「希望する就職先があるから」で39.0%であった。次いで多いのは「生活環境・文化が好きだから」が31.4%、「都会で働きたいから」が29.5%となった。また、将来的に帰ってくる気持ちがあるかを質問した。「ある」「少しある」と回答したのは26名（23%）という結果になった。残りの学生は八戸エリアとの関係がなくなってしまうことになる。ちなみに、八戸エリア外の出身で帰ってきたいという学生は20名であり、個人属性の特徴として、女子11名、1年生10名、出身は北海道・東北地域が多いということがわかった。

3) 八戸エリアに対する課題

上記と同じ対象の114名には、「どのような条件・環境が整えば、八戸エリアに帰ってきたいと思いますか」と表5の項目において複数回答可で質問した。最も多いのは「買い物などの日常の便利さ」が27.2%であり、次の「仕事や就職先の確保」24.6%よりも多い結果になった。また同率2位で「スポーツや遊ぶ場所の充実」となっており、仕事以外にも日常生活の豊かさを八戸エリアには希望している傾向がある。

表5 帰りたいと思える条件・環境（複数回答）

選択項目	回答数	選択率
仕事や就職先の確保	28	24.6%
買い物などの日常の便利さ	31	27.2%
イベントや賑わいの充実	8	7.0%
公共交通機関の充実	11	9.6%
仕事や暮らしの魅力的な情報	17	14.9%
スポーツや遊ぶ場所の充実	28	24.6%
病院等の医療機関の充実	3	2.6%
出産・子育て環境の充実	5	4.4%
介護など福祉サービスの充実	3	2.6%
教育環境の充実	3	2.6%
防災対策の充実	0	0.0%
その他	9	7.9%

(3) 考 察

現在のスポーツ学生は、八戸エリア以外から入学している学生が多く、その学生のほとんどが卒業後は八戸エリア以外へ就職を希望していることが明らかになった。また、八戸エリアに愛着を感じている学生は半数位であり、魅力をよくわからない状態といえる。エリア外へ出る理由としては仕事や就職先という要因が多いが、一方で、八戸エリアに定着したいとすれば、仕事以外にも日常生活やスポーツや遊びというライフスタイルの充実を期待している傾向が見えた。

4. 八戸エリア体験プログラムの実証実験

(1) 目的と設計

上記2つの調査より、学生がキャリアを考えるには、普段は接点がない社会人の話を聞くことが効果的と考え、さらに地域について考えるきっかけを同時に与えるために、八戸エリアで

積極的に活動している社会人に会い、話を聞き、仕事や職業について知るだけでなく、ライフスタイルまで知ることができるような体験が必要だと考えた。

そこで設計したのは、地域の産業を知るために、職場体験や現場見学、そこで働く人との会話と、地元の食材を使った食事を体感しながら地元住民と交流して、自分が生活するイメージを持ってもらうという流れである。

この体験に参加する学生は、なるべく八戸エリア外のスポーツ学生としたが、主体的な参加は望めなかったため、部活関係の教職員の協力を得て、就職活動最中の大学3年生を中心に集めてもらった。

(2) プログラムの概要

- 1) 期間：2018年1月15日（月）～18日（木）、31日（水）の5日間
- 2) 場所：本学、フィールドワーク先（八戸市、南部町、岩手県洋野町）
- 3) テーマ：八戸エリアの人とまちと仕事に触れ合う
- 4) 参加学生：14名（そのうちスポーツ学生12名、そのうち3年生11名）
- 5) プログラム：表6参照

表6 八戸エリア体験プログラム内容

概要	事前研修	アクションラーニング期間			事後研修
日程	1月15日	1月16日	1月17日	1月18日	1月31日
活動目標	目的・企画作成のステップを理解し、チームメンバーとコミュニケーションをとる	レポート作成についての基本知識を学習した上で、フィールドワークとレポート作成のサイクルを体験しておく	地域の観光資源を体験し、地域で活躍する人と交流する。生き方、働き方、まちとの関わり方などを感じる	これまで地域で体験したこと、学んだことをチームで取りまとめ、プレゼンテーションする	これまでの活動を改めて振り返り、今後の自分自身の行動や挑戦について考える
主な内容	プログラム概要や目的の説明	レポート作成について学ぶ	フィールドワーク③屋形船から八戸港見学	フィールドワーク⑤陸奥湊駅朝市で朝食	体験プログラムの振り返り
	チーム分けのワーク	フィールドワーク①株式会社ひろの屋	フィールドワーク④南部町にて郷土料理体験	体験プログラムのレポートの作成	自分自身の変化を対話
	チームについて学ぶ	初日レポートの作成と発表	ワールドカフェ 地域で働く社会人4名と交流	体験プログラムのレポートの発表	八戸エリアに対する変化を対話
	観察について学ぶ	フィールドワーク②八戸中心街まち歩きツアー		振り返り	事後アンケート

(3) 実施結果と考察

5日間の集中プログラムを通して、学生から最も印象に残っていることで多かった回答は、レポート作成であった。今まで聞いたことがない社会人からの話をただ聞くだけではなく、その中で自分は何を感じたか・考えたか・学んだかをその都度振り返りした。そのため、学生が言うには普段使わない頭を使って大変だったが、考えを整理して他人に発表することができた達成感を味わったようだった。この経験を活かして、キャリアについて視野を広げて調べるようになったり、これまで人に話しかけることが苦手だった学生が自分から話しかけるようになったり、学生生活で変化を感じることができたようだ。

さらに、今回話していただいた社会人は30代が多く、年齢的に学生に近いこともあって、学生時代にやっておいた方がよいことや、今の仕事で自ら挑戦していることを話していただいたため、学生には大いに刺激となり、今後の学生生活において主体的に活動する意思が生まれているようだった。

また、八戸エリアという地域に対しては、今まで何も知らなかったことを自覚し、地域の人と交流することによって、地域の良さを実感している様子だった。今回のプログラムは設計上、自ら地域を活性化しようという意識や活動が多い人を中心に訪問したため、学生にとっては地域に対して情熱を持っている人が多いと印象に残っていた。ただし、自分自身とは価値観が大きく違う人だと感じたのか、共感までは至らず、八戸エリアに卒業後も残りたいという変化が起きた学生は少数にとどまった。特に、八戸市より人口規模が大きい都市部出身の学生は、この時点では定住や移住の選択はないという回答だった。

5. 今後の展望と課題

今回の研究では、今まで感覚として捉えていたスポーツ学生の現状を、授業や調査をもとに客観的に把握することができた。現状では勉学やキャリアについて意欲が低い状態であり、地域に対する愛着や情報が少ないという課題が明確になったが、「社会人の話を聞く」「地域を知る体験をする」「自分事として振り返る」という解決策への糸口も見えた。ただし、スポーツ学生の調査人数はまだ少ないため、今後は様々な背景の学生を調査する必要がある。

次に地域に対する意識においては、自分自身が知らないことが多いという認識があり、体験することで興味関心を持ち始めることがわかった。しかし、定住や移住を促進するためには、短期間の体験では難しく、長期的に地域に関わる経験が必要であると考え。今回の八戸エリア体験プログラムに協力していただいた企業や団体の方は、学生との交流で自身にも良い影響があったようで、今後も協力していただける展望が見えた。大学だけでは継続的なプログラムを実施していくことは難しいため、協力していただける地域の人たちを巻き込みながら、地域全体で学生を育てる仕組みや制度を構築していきたい。